

古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり
 ～ 古典における言語活動の工夫を通して ～

目 次

I	研究の概要	4	1
	1 研究主題	4	1
	2 主題設定の理由	4	1
	3 研究目標	4	1
	4 研究仮説	4	1
	5 研究構想	4	2
	6 研究経過	4	3
II	研究の実際	4	3
	1 研究の基本的な考え方	4	3
	(1) 「めざす生徒像」についての考え方	4	3
	(2) 「なぜ古典を学ぶのか」と古典の魅力について	4	5
	(3) 「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」の考え方	4	6
	(4) 系統性に関する基本的な考え方	4	7
	(5) 古典の学習における言語活動の位置づけ	4	9
	(6) 評価の基本的な考え方	4	10
	2 単元「徒然草」における授業実践	4	11
	(1) 学習指導計画	4	11
	(2) 作品を理解する学習活動について	4	12
	(3) 【プレ気づく】の学習活動について	4	12
	(4) 「気づく」段階の学習活動について	4	13
	(5) 「共感する」段階の学習活動について	4	15
	(6) 「生かす」段階の学習活動について	4	17
	3 研究内容の検証	4	18
	(1) 仮説1の検証	4	18
	(2) 仮説2の検証	4	18
	(3) 仮説3の検証	4	19
	(4) 古典に対する意識への検証	4	20
III	研究の成果と課題	4	20
	1 成果	4	20
	2 課題	4	20
	〈 参考文献 〉	4	20

I 研究の概要

1 研究主題

古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり
～ 古典における言語活動の工夫を通して ～

2 主題設定の理由

現代社会の国際化に伴い、「国際競争」が加速し、「国際共存・国際協力」の必要性も高まってきた。そのため、「国際競争を生き抜くために必要な知識・理解や思考力、判断力、表現力」「英語等の語学力」等とともに、共存の大切さを理解して、他国を尊重するうえで必要な「国や郷土を愛する心」についても、重視されるようになってきた。

このような社会の現状を反映させ、教育基本法や中央教育審議会の答申を受け、学習指導要領が改訂された。この中で、「言語活動の充実」「理数教育の充実」「外国語教育の充実」など、教科における指導の充実が図られるとともに、「伝統や文化に関する教育の充実」や「道徳教育の充実」などについても推進されることになった。特に国語科においては、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、古典の学習内容が改善されるとともに、読書指導の中にも、古典に関する作品を取り上げるように示された。

「国や郷土を愛する」うえで、古典が重視されるのはなぜか。「国や郷土を愛する」には、そこに住む人々について知り、その魅力を感じる必要がある。そして、国や郷土が長い歴史の中で、時間をかけて作られてきたことを考えれば、現代だけでなく、過去の人々についても知る必要がある。したがって、古人の思いが書かれた古典の作品を読むことで、過去の人々について知り、その魅力を感じることは、「国や郷土を愛する」うえで、大切なことなのである。

これらのことを踏まえ、研究主題を設定するにあたり、研究実践校で実態把握を行ったところ、必ずしも、古典に対して親しみ、何かを感じ取ろうとする姿勢が育っているとはいえなかった。時代の違いから、古典の世界に対してへだたりがあり、古典の世界を身近な存在として感じるができず、「将来大人になったら、古典を読もうと思っていない」という生徒が、全体の74%いた。また、古典を学ぶ意味については、「なぜ古典を学ぶのかよくわからない」等の、学ぶ意味を十分に理解できていない生徒が、全体の51%いた。さらに、古典に対して、時代を超えた共通性を感じるかどうかについては、「古典の内容に『なるほど』と共感することがない」と答えた生徒が、全体の57%いた。

そこで、これらの実態を考慮し、生涯にわたって自ら古典と親しみ、言語文化への関心を広げたり深めたりすることができるよう、「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり」を行うことにした。

研究を進めるにあたっては、授業の中に「気づく」「共感する」「生かす」という3つの段階を設定し、言語活動を用いて、考えを整理・練り上げ・表現させようと考えた。まず、「気づく」段階として、古典の魅力に気づかせ、なぜ古典を学ぶのかという必要性を感じさせる。次に、「共感する」段階として、現代にも通じる時代を超えた共通性を感じさせ、共感的な視点を持たせる。そして、「生かす」段階として、古典を通して学んだことを自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげさせる。このような手立てを行うことにより、古典の魅力に気づき、共感的に受け入れ、自分の価値観や考え方に生かそうとする生徒が育つと考え、本主題を設定した。

3 研究目標

生涯にわたって、自ら古典に親しみ、言語文化への関心を広げたり深めたりする態度を育てるために、「気づく」「共感する」「生かす」ことのできる生徒を育成する古典学習のあり方について、理論研究及び実践による検証を行う。

4 研究仮説

- 1 古典の作品への理解を深め、自分の考えを整理する言語活動に取り組むことで、生徒が作品の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解することができるであろう。
- 2 理解した古典の内容と現代の作品を比べ、自分の考えを練り上げる言語活動に取り組むことで、生徒が時代を超えて、古典の作品に共感することができるであろう。
- 3 「気づく」「共感する」をもとに、自分の考えを表現する言語活動に取り組むことで、生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげようとするであろう。

宮崎県教育基本方針

たくましいからだ

基礎体力の向上

豊かな心

基本的な生活習慣やマナー・エチケットの育成

すぐれた知性

基礎学力の向上

山田中学校の教育目標

豊かな心をもち意欲的に学習に取り組む生徒の育成

研究主題

古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業づくり

～ 古典における言語活動の工夫を通して ～

関係法規
学習指導要領

教職員・保護者の願い
生徒の実態

めざす生徒像

古典の魅力に気づき、共感的に受け入れ、自分の価値観や考え方に生かそうとする生徒

研究仮説

仮説 1

古典の作品への理解を深め、自分の考えを整理する言語活動に取り組むことで、生徒が作品の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解することができるであろう。

仮説 2

理解した古典の内容と現代の作品を比べ、自分の考えを練り上げる言語活動に取り組むことで、生徒が時代を超えて、古典の作品に共感することができるであろう。

仮説 3

「気づく」「共感する」をもとに、自分の考えを表現する言語活動に取り組むことで、生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげようとするであろう。

研究内容

「気づく」

古典の魅力に気づく

自分の考えを整理する言語活動

「共感する」

時代を超えて共感する

自分の考えを練り上げる言語活動

「生かす」

価値観や考え方に生かす

自分の考えを表現する言語活動

理論研究

「めざす生徒像」についての考え方

言語活動のポイント

「気づく」「共感する」「生かす」についての考え方

評価の基本的な考え方

6 研究経過

月	研究内容	備考
4	研究主題及び副題の設定 研究計画の立案 理論研究（学習指導要領及び文献の読み込み） 理論研究（学習指導要領の新旧比較）	
5	理論研究（学習指導要領の内容の図式化） 理論研究（研究構想図の作成）	
6	検証授業に関する打ち合わせ 理論研究（「めざす生徒像」についての考え方） 実態調査内容（アンケート項目）の検討	山田中学校
7	理論研究（「気づく」「共感する」「生かす」についての考え方） 実態調査①の実施 実態把握・分析	山田中学校
8	中間発表会の準備 理論研究（言語活動のポイント）	
9	理論研究（評価の基本的な考え方） 検証授業の準備 実態調査②の準備	
10	検証授業の実施 実態調査②の実施 検証授業の分析 実態把握・分析	山田中学校 山田中学校
11	研究内容の整理 研究のまとめ	
12	研究報告書の作成	
1	研究発表の準備	
2	研究発表の準備	
3	研究発表	

II 研究の実際

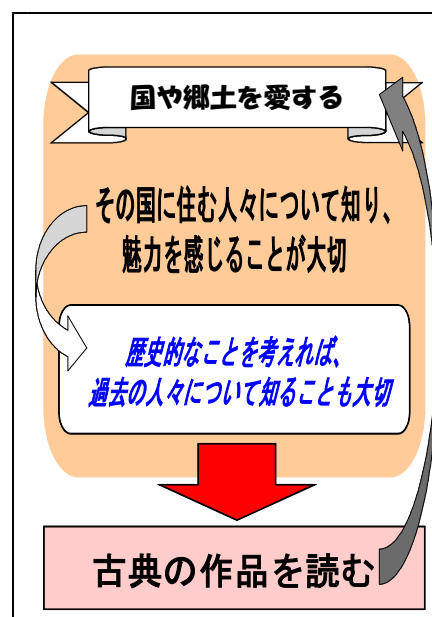
1 研究の基本的な考え方

（1）「めざす生徒像」についての考え方

① 古典の作品にふれる必要性

国際化の流れの中で、教育基本法の第2条では「伝統や文化を尊重し、我が国と郷土を愛する」ことが、教育の目標として示された。この第2条の「国や郷土を愛する」とは、生徒たちのどのような姿をめざし、そのためにどのような指導が求められているのだろうか。

「国や郷土を愛する」には、国や郷土に対して魅力を感じる必要がある。また、国の魅力とは、その国の自然が持つ美しさ等とともに、その国に住む人々がどのように生き、どのような文化を築いてきたのか、といった人の魅力のことだと考えられる。したがって、「国や郷土を愛する」には、そこに住む人々について知り、その魅力を感じる必要がある。そして、国というものが、長い歴史の中で時間をかけて作られてきたことを考えれば、過去の人々についても知る必要がある。よって、古人の思いが書かれた古典の作品を読み、過去の人々について知り、その魅力を感じる必要がある。よって、古人の思いが書かれた古典の作品を読み、過去の人々について知り、その魅力を感じる必要がある。よって、古人の思いが書かれた古典の作品を読み、過去の人々について知り、その魅力を感じる必要がある。



「国や郷土を愛する」ことと
古典との関係について

② 生徒の実態

生徒は、古典に対して、どの程度関心があるのだろうか。

研究実践校の2年生を対象に、次のようなアンケートを行った。「古典を、将来大人になって読んでみようと思いますか」という問いに対して、古典に関心がなく、将来読んでみようとは思わないという生徒が全体の74%いた。(表1)

その原因として、まず考えられるのが古語(歴史的仮名遣い等)に対する抵抗感である。ただ、実際に歴史的仮名遣い等に苦手意識を感じているのは、全体の51%であり、残りの半数は、特に苦手だとは思っていなかった。(表2)

では、なぜ74%もの生徒が、将来読んでみようと思わないのか。それは、時代の違いから、古典の世界に対してへだたりがあるため、共感することができないからではないか、と考えた。そのため、古典のおもしろさがわからないのである。アンケートの結果からも、古典の内容に「なるほど」と共感することがない生徒が、全体の57%いることがわかった。(表3)

③ めざす生徒像

本研究では、生徒の古語に対する抵抗感にも配慮しつつ、古典の世界へのへだたりに減らす取組を中心に授業を組み立てることで、生徒の古典への興味・関心を高められるのではないかと考えた。古典の世界へのへだたりに減らすために、生徒に必要なのが「古典の魅力に気づき、なぜ古典を学ぶのか、という必要性を感じる」「古典を特別なものとして見るのではなく、時代を超えた共通性があることを感じ、共感する」という2点である。そして、共感を深め、生涯にわたって自ら古典に親しむことを考えれば「古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげる」ということも必要になる。

そこで、具体的な授業の工夫・改善を行ううえで、めざす生徒像を、次のように設定した。

めざす生徒像

「古典の魅力に気づき、共感的に受け入れ、自分の価値観や考え方に生かそうとする生徒」

古典の本を、将来大人になって読んでみようと思いますか。

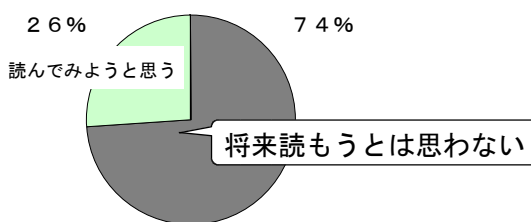


表1

昔の言葉に対して苦手意識がありますか。

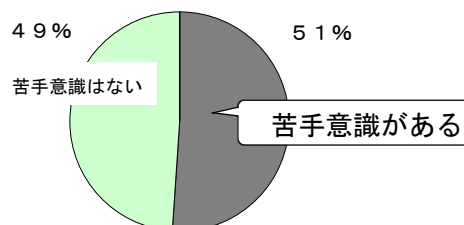


表2

古典の内容に「なるほど」と共感することがありますか。

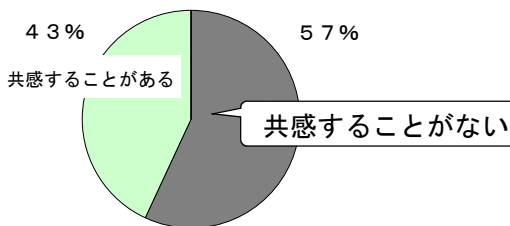


表3

(2) 「なぜ古典を学ぶのか」と古典の魅力について

古典の世界へのへだたりを減らし、生徒が「古典の魅力に気づき、なぜ古典を学ぶのか、という必要性を感じる」ような指導を行ううえで、歴史的な背景も踏まえ、「なぜ古典を学ぶのか」と古典の魅力について、内容を整理した。

① 「なぜ古典を学ぶのか」について

戦後、古典の教育からの解放が叫ばれ、昭和 22 年の『学習指導要領』では、古典の教材が大きく削減された。その後、古典教育の良さが見直され、昭和 26 年の『中学校高等学校学習指導要領国語科編（試案）』では、次のように古典は位置づけられた。

「古典の読み方を学習して、古典に親しみを持ち、われわれの生活とどんなつながりがあるかを考え、古典の持つ価値を現代に生かすように心がけることは、人間形成の上に必要なこと」

つまり、古典を学ぶうえで大切なのは「自分たちの生活とのつながりを考えること」と「古典の持つ価値を現代に生かすこと」の 2 点だということがわかる。これは、今回の『学習指導要領』の「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる」ことにもつながる考え方である。

また、渡辺春美氏は著書『国語科授業活性化の探究Ⅱ』の中で、古典を学ぶ意味を 4 点挙げている。

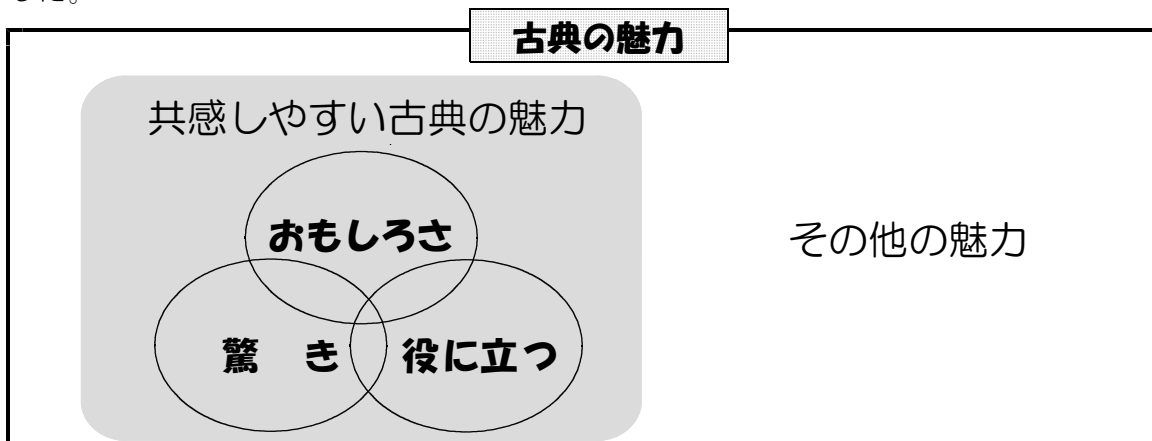
- 「現代は過去に支えられているという事実気付く」
- 「過去の人物を通して、普遍的な人間性に気付く」
- 「現代にも生きている過去の人々の知恵に気付く」
- 「古典を通して新たなものの見方・感じ方・考え方に気付く」

「国語科授業活性化の探究Ⅱ」 (渡辺春美1998.8)

このような「なぜ古典を学ぶのか」についての理論は重要ではあるが、そのまま生徒に説明してもわかりにくい。そこで、今回は「なぜ古典を学ぶのか」を考える前に、古典の魅力について気づかせてから、古典を学ぶ必要性について考えさせた。

② 古典の魅力について

古典の作品は様々な種類があり、その魅力は無数にある。その中から、古典の世界へのへだたりを減らすことを考慮し、教科書で取り扱う題材の内容をふまえ、共感しやすい「おもしろさ」「驚き」「役に立つ」という 3 つを中心に、考えさせることにした。

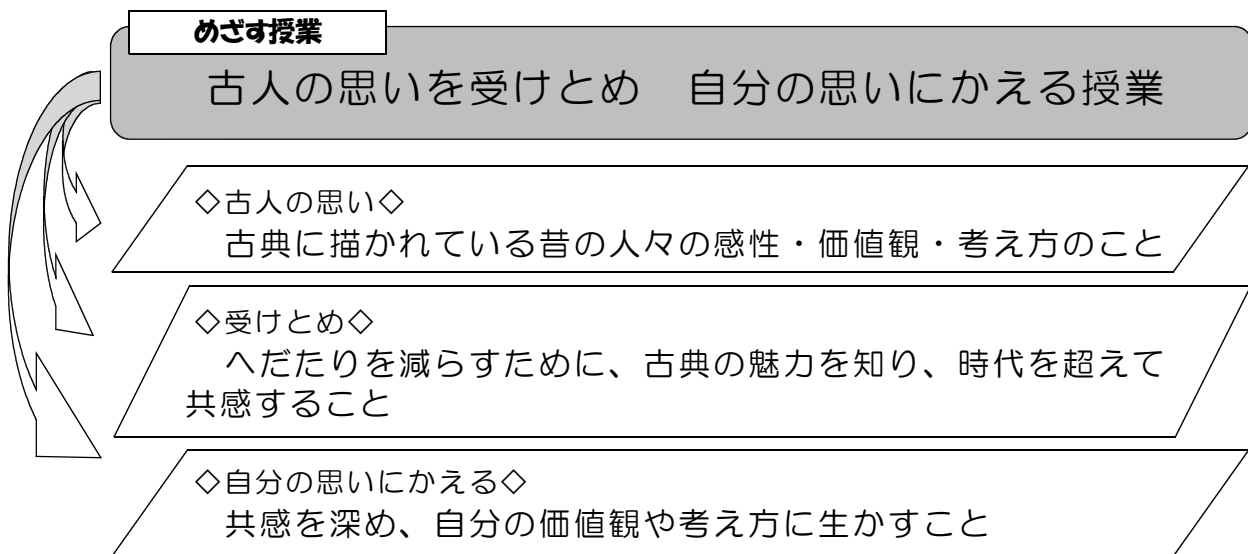


「古典の魅力」のイメージ図

(3) 「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」の考え方

① めざす授業について

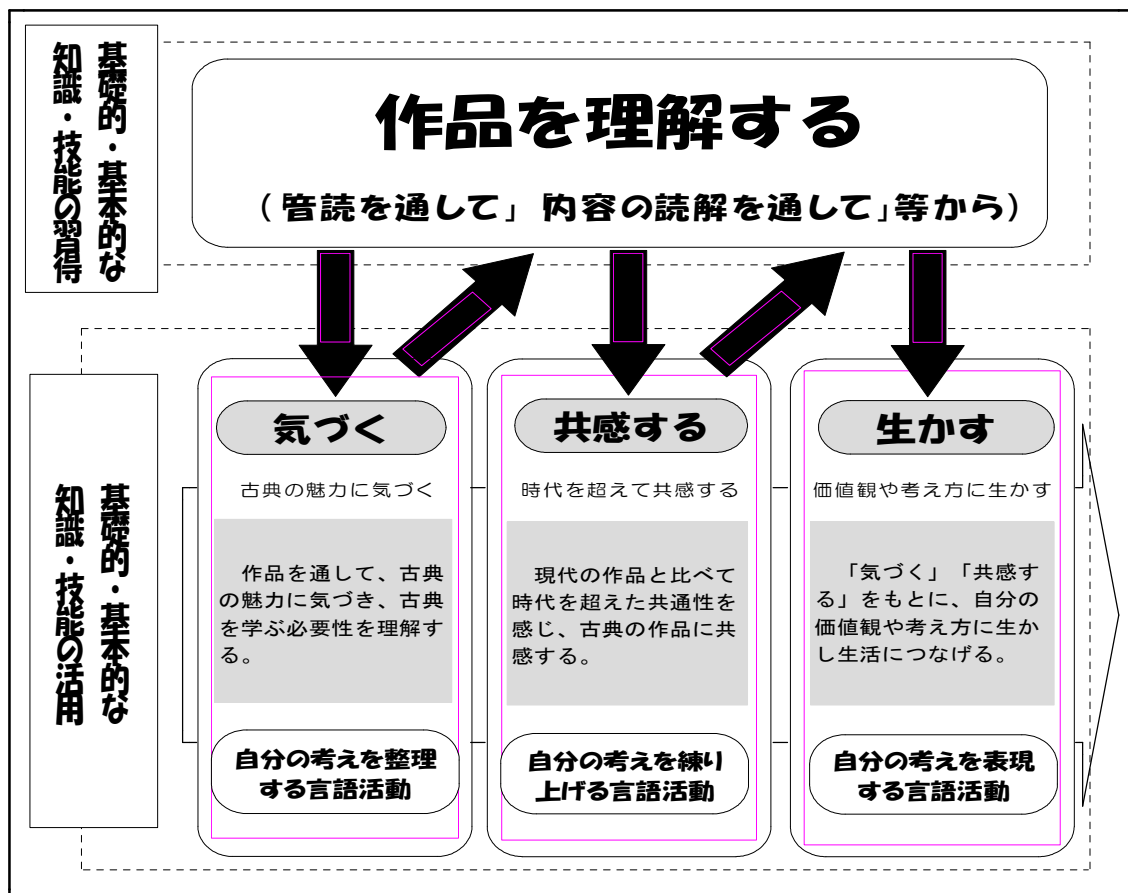
古典の世界へのへだたりを減らし、生徒をめざす方向へ導くために、めざす授業を、次のように設定した。



② 学習過程について

「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」では、「気づく」「共感する」「生かす」という3つの段階を設定し、学習過程の工夫・改善を行った。

学習過程については、次の通りである。



学習過程について

③ 「気づく」段階について

「古人の思いを受けとめ」るために大切なのが、生徒の古典を学ぶ意識である。古人の思いを時代を超えて共感するには、生徒自身が古典をなぜ学ぶ必要があるのか、理解しておく必要がある。しかし、古典の世界に対してへだたりを感じている生徒にとって、「なぜ古典を学ぶのか」と問われても答えにくい。そこで、今回の研究では、まず古典の魅力について気づかせることにした。さらに、事前に【プレ気づく】という活動を設定し、現代における書物の魅力についても考えさせておくことで、古典の魅力と比べさせ、古典が特別なものではないという意識を持たせようと考えた。そのうえで、「なぜ古典を学ぶのか」について考えさせることにした。

④ 「共感する」段階について

言語が違っていても、世界中で愛読されている作品が数多くある。このように言語の違いを超えて、作品が読まれ続けているのはなぜか、と考えたとき、それは自分の感性とその作品との間に「共感する」気持ちが働くからではないかと推論した。「共感する」気持ちが引き合う力となり、さらに読む意欲が増すのである。

古典についても、へだたりがあるという点では海外の書物の場合と同じであり、現代において、日常生活の中で古典にふれることは、生活様式の違い等から考えても難しい。したがって授業を通して、古典と現代の文章を比較し、時代を超えた共通性を探す場を設定して、共感的な視点を持たせることにした。

⑤ 「生かす」段階について

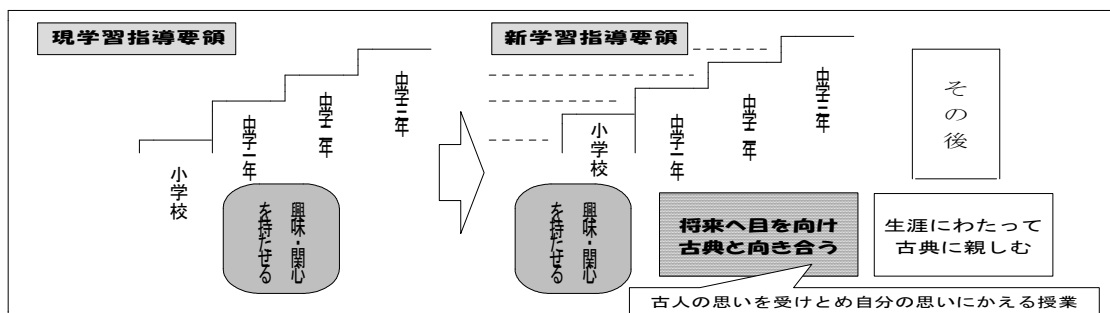
古典のような言語文化の場合、読んでみて「へえ、そうなのか」「昔の人は大したものだ」などの感想で終わったのでは、別世界のことという認識しかなく、生徒の生活にはつながらない。あくまでもその場限りのものになり、「古典は学校で学ぶもの」という意識のままである。したがって、生涯にわたって古典に親しむようにするためには、生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活とつなげて考えるようにすることが大切である。そこで、授業の中で、生徒に生活を振り返らせ、古典に対して共感したことと自分の生活とを比べさせた。そのうえで、生徒が自分の生活を意識して古典について考え、表現できるようにした。

(4) 系統性に関する基本的な考え方

① 小学校における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」との系統性

今回の学習指導要領の改訂により、小学校の第1学年から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する学習が始まる。このことは、古典に慣れ親しむ段階が、今までと比べて早まることを意味している。

この点を考慮すると、中学校において、今までのような古典に慣れ親しませることを中心とした学習から、将来に目を向け、今後どう古典と向き合っていくのかを意識させるような学習へと、変えていく必要があると思う。それが本研究でいう「古人の思いを受けとめ自分の思いにかえる授業」である。



小・中学校の系統性

② 中学校における学年の系統性

「気づく」「共感する」「生かす」については、単学年のみで実施するのではなく、3年間を見通して、系統的に実施していく必要がある。

そこで計画するにあたり、『学習指導要領』の指導内容と生徒の実態を考慮し、第1学年では、「気づく」段階の内容や取り扱い時数等を重点的に増やし、「生かす」段階を減らした。また「共感する」段階については、各学年の指導内容を考慮しながら、どの学年でも同程度取り扱った。そして、学年が上がるにつれ「気づく」段階を減らし、逆に「生かす」段階の内容や取り扱い時数等を増やした。

取り扱う題材については、第1学年では『枕草子』、第2学年では『徒然草』、第3学年では『奥の細道』とした。

各学年で、題材を1つにした理由は2つある。1つ目は、時数の問題である。今回の研究内容は、作品を理解する授業を発展させるもので、ある程度の時数を必要とする。すべての古典の題材で同じように行えば、年間指導計画の中で、他の単元とのバランスがとれない。3年間かけて計画的に実施することにより、学年で1題材ずつ実施すれば、十分に効果があると考えた。2つ目は、題材の内容の問題である。古典には、物語、随筆、軍記物、紀行文、漢文（漢詩）等、たくさんのジャンルがある。その中で、研究内容の「気づく」「共感する」「生かす」といった活動を考えたとき、もっとも効果的なジャンルは、随筆や紀行文といった筆者の主張がはっきりしている文章ではないか、と考えた。また、「国や郷土を愛する」ためには、まず我が国の古人について知る必要がある、という研究の流れを考慮し、中国の古典である漢文（漢詩）については、題材として取り扱わないことにした。

また、【プレ気づく】の活動については、第1学年の「気づく」段階の中で計画し、授業の効果を高めようと考えた。（今回の研究では、第2学年で検証を行ったため、第2学年で【プレ気づく】の授業を行った。）

	気づく	共感する	生かす
一年	【プレ気づく】 身の回りにある本の魅力を整理する。	古典の魅力として「おもしろさ」「驚き」があることに気づく。	作品の内容について理解し、現代にも同じような考え方があることを知る。
		枕草子	
二年	本の魅力の例 ① おもしろい ② 楽しい ③ スリルがある ④ 驚きがある ⑤ わかりやすい ⑥ 役に立つ ⑦ 共感できる ⑧ 作家が好き ⑨ 表紙の絵 ⑩ 題名がいい	古典の魅力として「おもしろさ」「驚き」に加えて「役立つ」があることに気づく。	作品の内容や作者の思いについて理解し、現代にも同じような考え方があることを知る。
		徒然草	
三年		古典の魅力として3つの視点を再確認する。	作品の内容や歴史的背景、古人の知恵や感性を理解し、現代にも同じような考え方があることを知る。
		奥の細道	

題材と活動内容に関する系統

(5) 古典の学習における言語活動の位置づけ

「気づく」「共感する」「生かす」という段階をふまえて学習を進めるには、音読やグループ発表といった従来の授業内容だけでは不十分であり、学習の効果を高めるために、言語活動を工夫し、授業に取り入れることにした。

そこで、言語活動のポイントを、次のようにまとめた。

○ 言語活動とは
言語活動は、授業における指導目標の実現のために、児童生徒のそれまでの学習歴や言語能力の実態を踏まえ、意図的・計画的に設定する学習活動。

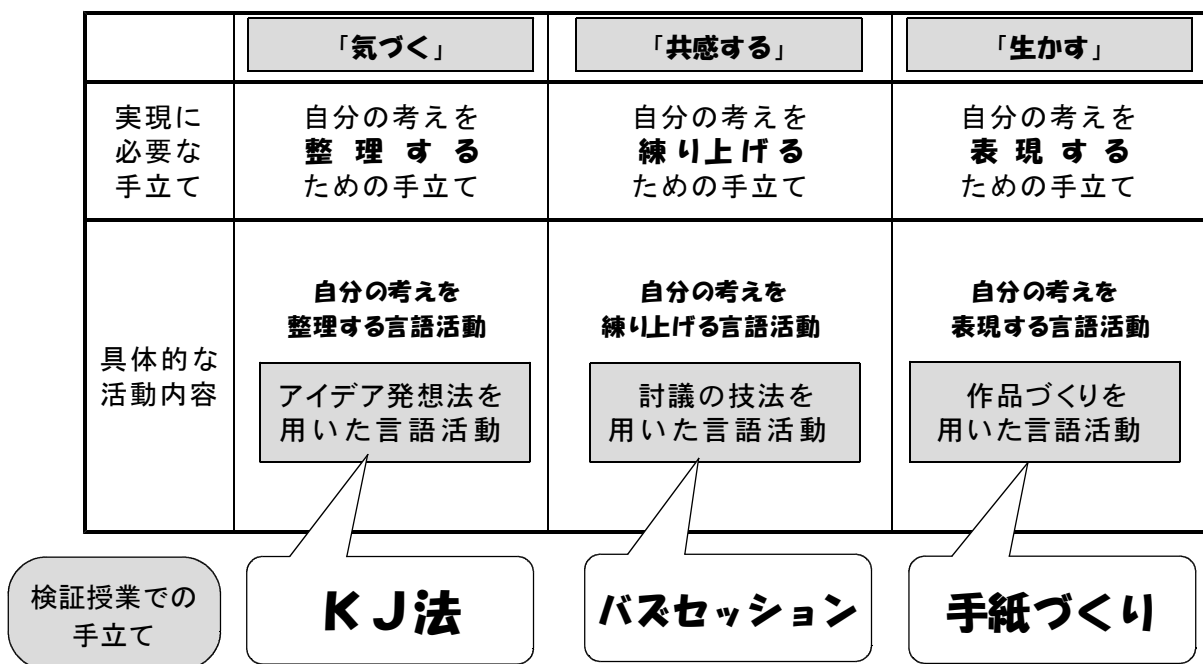
※ 言語活動が単に活発な話合いや発表を位置付けるだけのものではなく各教科等のねらいの実現に寄与するものとなる必要がある。

「各教科等における言語活動の充実 一移行期、国語科の役割一」 (田中孝一2009.5)

このような言語活動の趣旨を考え、本研究では「気づく」「共感する」「生かす」の各段階で言語活動を充実させるために、指導目標と言語活動の目的を次のように設定した。

	各段階における指導目標	言語活動の目的
「気づく」	作品を通して、古典の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解する。	作品の魅力に気づくために、印象に残ったところを整理すること。
「共感する」	現代の作品と比べて、時代を超えた共通性を感じ、古典の作品に共感する。	理解した古典の内容をもとに、現代の作品と比べ、共通点をまとめること。
「生かす」	「気づく」「共感する」をもとに、自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげる。	「気づく」「共感する」をもとに、自分の価値観や考え方に生かして書くこと。

この言語活動の目的をもとに、目的の実現に必要な手立てと具体的な活動内容を、次のように設定した。



(6) 評価の基本的な考え方

検証授業を実施するにあたって、2つの視点で評価を行うことにした。

① 生徒の評価

古典における意識の変容の評価

② 指導方法に関する評価

指導方法の工夫・改善につながる評価

① 生徒の評価について

今回の検証では、生徒の学習状況について、どのように生徒の意識が変容したかを中心に把握した。そこで、「関心・意欲・態度の面で、古典に親しむ態度が見られたか」「言語活動を通して、どのように意識が変容したのか」「最終的に、これからも古典に親しもうという気持ちが芽生えたのか」という3つの視点を中心に、授業中の観察やワークシートの記述をもとに、生徒の評価を行った。

評価の視点	評価方法	評価時期
○ 生徒の学習意欲や充実感などの関心・意欲・態度はどうだったか。	自己評価表 及び 事後アンケート	授業後
○ 「生涯にわたって、自ら古典と親しみ、言語文化への関心を広げたり深めたりする」ような意識の変容はあったか。		
○ 「生かす」に関する生徒の考え方はどうだったか。	ワークシート	
○ 「気づく」「共感する」に関する生徒の考えの変容はどうだったか。	ワークシート 観 察	授業中又は 授業後

② 指導方法に関する評価について

評価は、生徒のために行うものであると同時に、教師として指導方法を工夫・改善していくうえでも大切なものである。したがって、指導方法をより効果的にできないか、という視点も必要である。今回は、言語活動を用いた研究であり、その言語活動の有効性について評価を行った。言語活動は、前述の通り、指導目標の実現のために設定する活動である。そこで、指導目標がどの程度達成できたのかを評価した。さらに、「気づく」「共感する」「生かす」という流れをとって言語活動を行うことが、本当に効果的だったのか、という視点からも評価を行った。評価方法としては、授業中の観察や事後アンケートを取り入れた。

評価の視点	評価方法	評価時期
○ それぞれの言語活動の手立ては効果的だったのか。	事後アンケート 観 察	授業中又は 授業後
○ 「気づく」「共感する」「生かす」の流れはよかったのか。		

2 単元「徒然草」における授業実践

(1) 学習指導計画

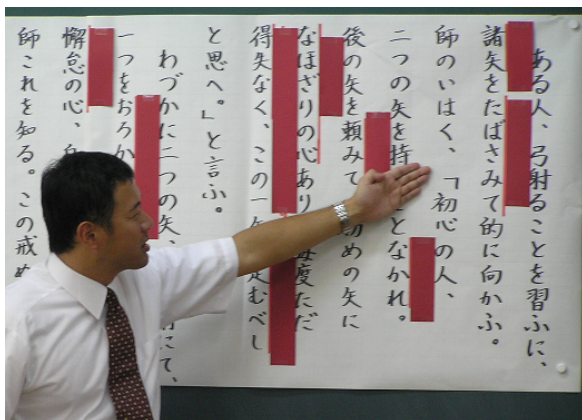
1 単元名 古典を楽しもう (徒然草)			
2 目 標			
○ 古典を学ぶ意味に気づき、楽しみながら、意欲的に古典とかかわろうとする。 [関・意・感]			
○ 古人のものの見方や考え方をとらえ、時代を超えた共通性を感じて共感的な視点をもつ。 [伝統的な言語文化]			
3 作品 (徒然草九二段) について			
<p>【 口語訳 】</p> <p>ある人が、弓を射ることを習うときに、二本の矢を手にして的に向かった。師匠の言うには、「初心者は、二本の矢を持ってはならない。後の矢をあてにして、初めの矢を射るときに 油断が生じるものだ。毎回ただ、命中するかどうか迷わず、この一本の矢で必ず当てようと思え。」と言う。</p> <p>たった二本の矢なのに、師匠の前で、一本をおろそかにしようと思うだろうか。油断する心は、自分自身では気づかなくても、師匠はこれを見通す。この教訓は、すべてのことに通ずるであろう。</p>			
4 指導計画			
時間	学習内容及び学習活動	研究に関わる生徒の姿	必要な言語活動
第1次	1 音読や口語訳を行い、作品を理解する。		
	2 身の回りにある本の魅力を整理する。	【プレ気づく】	
第2次	1 徒然草(九二段)を音読し、内容を思い出す。 2 KJ法を使って、徒然草(九二段)の中で、印象に残ったことを整理する。 3 発表をもとに、作品の魅力をまとめる。 4 徒然草(九二段)の魅力と「プレ気づく」で考えた本の魅力とを比べ、古典の魅力について考える。 5 古典を学ぶ必要性を理解する。	作品から、古典の魅力として「おもしろさ」「驚き」に加えて「役立つ」があることに気づき、古典を学ぶ必要性を理解する。	自分の考えを整理する言語活動 〔 KJ法を用いた言語活動 〕
	1 徒然草(九二段)を音読し、口語訳を確認する。 2 徒然草(九二段)の主題を確認する。 3 北島康介の手記の内容との共通性を探す。 4 グループで話し合い、考えをまとめる。 5 全体で意見を発表してまとめる。 6 スラムダンクの1シーンを見て、古典に対する共感的な気持ちをもつ。	作品の内容や作者の思いについて理解し、現代の作品(北島康介の手記)と比較することで、現代にも同じような考え方があることを知る。	自分の考えを練り上げる言語活動 〔 バズセッションを用いた言語活動 〕
第4次	1 徒然草(九二段)を音読し、既習の内容を復習する。 2 学習したことをもとに、兼好法師あての手紙を書く。 3 できあがった文章を見直し、推敲する。 4 手紙を完成させて発表し合う。	「気づく」「共感する」をもとに、自分の価値観や考え方に生かし、「兼好法師への手紙」を作成することで、生活につなげる。	自分の考えを表現する言語活動 〔 手紙づくりを用いた言語活動 〕

(2) 作品を理解する学習活動について

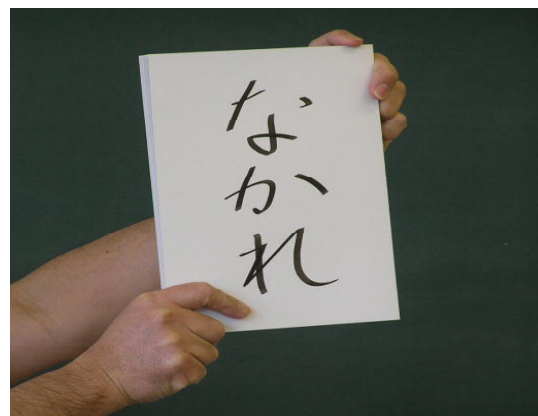
作品理解が、古人の思いを受けとめ自分の思いにかえるための最初の活動になる。研究内容である3つの段階の前に行うが、十分な作品理解がなければ、古人の思いを自分の思いにかえることはできない。

そこで、手立てを2つ工夫した。1つ目は、本文と口語訳を並べて表記した紙を、黒板に貼るという工夫である。この紙は、教科書を用いて音読練習をした後に使用した。最初は、色画用紙で口語訳の部分を伏せておき、クイズ形式で質問しながら音読を行った。その後は、口語訳が見える状態のまま、音読や内容の説明を行った。この紙を用いるねらいは、生徒の顔を上げさせ、集中させることができることと、古語に慣れず、意味をなかなか覚えられない生徒の抵抗感を、取り除くことができることである。事前のアンケート結果では、約半数の生徒が古語に対して抵抗感があったため、このような配慮も必要だと考えた。

2つ目は、フラッシュカードを用いて古語の音読練習をする、という工夫である。英単語の練習等でよく用いられる方法だが、意味を覚えるという点は重視せず、すらすらと発音するという点を重視した。生徒が古語を苦手とする理由の1つに、上手にすらすらと読めないことが考えられる。これは、読む力が育っていないということもあるが、口語と違うため、どこで切って読めばいいのかわからない、ということが考えられる。したがって、切って読む所を明確にさせるため、単語の長さで発音練習を行った。



本文と口語訳を並べて表記する掲示



フラッシュカードを使った古語の音読練習

(3) 【プレ気づく】の学習活動について

次時で取り扱う古典の魅力と比べさせるため、あらかじめ、現代の書物の魅力について考えさせた。まず「本屋でよく売れる本には、どんな魅力があるのだろうか」という学習課題について、KJ法を用いて意見をまとめた。

なぜ、古典の時間にこのような話し合いを行うのか、不思議そうな生徒もいたが、「次の時間に関係があるから」とだけ説明し、生徒の疑問はそのままにしておいた。その方が、生徒の関心・意欲が持続すると考えたからである。

付箋紙に書いたことをもとに、グループで話し合いながら、種類分けを行った。中には「表紙の絵がいいから」といった、本の内容とは関係のない視点で書く生徒もいたが、本の内容を様々な視点で整理することができた。例えば、「好きな芸能人が載っている」「好みが合う」「本当のことが書いてあるので共感できる」等の意見を、「共感できる」ところが魅力だ、とまとめていた。最終的に、右のような本の魅力を、全体で確認した。

本の魅力の例

- ① おもしろい
- ② 楽しい
- ③ スリルがある
- ④ 驚きがある
- ⑤ わかりやすい
- ⑥ 役に立つ
- ⑦ 共感できる
- ⑧ 作家が好き
- ⑨ 表紙の絵
- ⑩ 題名がいい

(4) 「気づく」段階の学習活動について

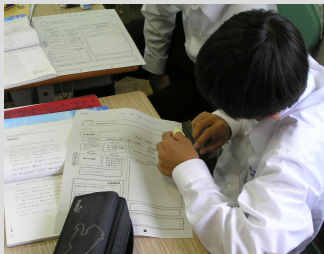
① 学習活動の様子

授業の流れとしては、まず、徒然草の九二段で印象に残ったことを出し合い、KJ法で整理させた。次に、整理したものをもとに、徒然草の魅力は何かを考えさせた。そして、考えた徒然草の魅力と、【プレ気づく】で確認した現代の書物の魅力とを比べて、同じような魅力があることに気づかせた。最後に、「なぜ古典を学ぶのか」に対する答えを、自分の言葉でまとめさせた。

このような授業の流れをとることで、古典が「教科書の題材」という対象から、「一冊の書物」という対象へと変わり、「なぜ古典を学ぶのか」という難しい問いを「なぜこの本を読むのか」という平易な形で考えることができると考えた。

◇ KJ法を用いた言語活動 ◇

徒然草の九二段には、主題の他にも、印象に残るような内容が数多くある。しかし、多くの内容を見つけるだけで整理しなければ、十分に理解することはできない。そこで、KJ法を用いて自分たちの意見を整理させた。



個人の意見を書く

言語活動を行う際は、自分の考えを持たせることが大切である。とくに古典が苦手な生徒にとっては、授業が人任せになってしまう可能性があるからである。付箋紙には、1人につき意見を3つずつ書かせた。作品の主題が2つあり、新しい別の意見を加えさせるためにも、最低3つは必要だと考えたからである。KJ法に慣れておらず、時間を要する生徒もいた。



グループで話し合う

個人で意見を書かせた後、グループで話し合い、同じ内容のものに整理させた。集めたものは、色画用紙にまとめて貼らせた。活動中はグループを回り、話し合いに対して助言したり、黙って見ている生徒に声をかけたりした。生徒は、意欲的に活動し、自分たちで整理できたことに満足していた。



見出しをつける

分けたものに見出しを付けさせた。見出しだということを意識させ、端的に表現できるように心がけさせた。考えた見出しは色の違う付箋紙に書かせ、分けたものの上に貼らせた。それぞれのグループが「集中する」という内容に対して、「集中力」「一球入魂」「次はない」等、いろいろな表現で見出しを付けていた。また「油断する」という内容に対して、「人間の弱い心」と抽象化した見出しを付けたグループもあった。



全体で発表しまとめる

作品の主題は「今、この瞬間に集中することの大切さ」「気付かぬうちに油断する気持ちは生まれる」の2点を考えていたが、「師匠のすごさ」「師匠の厳しさ」等、弓の師匠に対しての意見も多かった。

言語活動の後、徒然草の魅力について考えさせた。自分たちのまとめた作品の印象から、「役に立つ」「驚きがある」などの意見が出た。現代の書物の魅力の中にも、同じ内容のものがあつたことを確認し、昔も今も本の魅力は同じなのだ、と説明した。

最後に、これまでの学習を参考にして、「なぜ古典を学ぶのか」について、自分の考えをまとめさせた。徒然草の九十二段の内容が、初心者への教訓であることから、「役に立つ」という印象が強く、下のような意見が出された。

「なぜ古典を学ぶのか」に対する生徒の答え（一部）

- 「昔の人がやってきたことを、部活や勉強などに生かすことができるから」
- 「自分自身で忘れかけていたことや、現在の行動を振り返るいいチャンスができるから」
- 「今の自分にも、未来の自分にも役に立つことがあるから」
- 「人間が見逃している大切なことに気づかせてくれるから」
- 「今の自分と比べて、いろいろな欠点が見つかるから」
- 「昔の人がやってきたことを、今に生かすことができるから」
- 「古典からは、吸収できることがたくさんあるから」

② 授業の考察

ア 生徒の関心・意欲・態度について

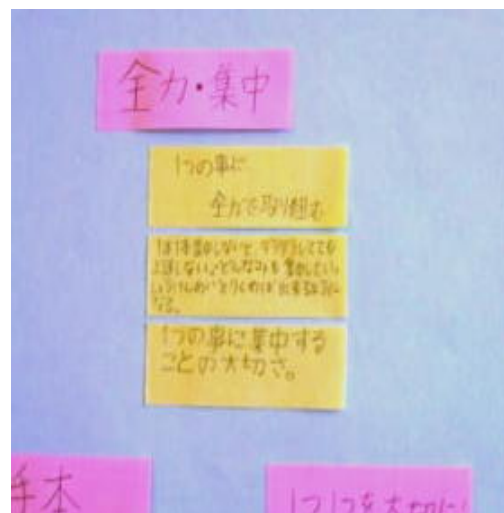
今まで、ほとんどKJ法を用いたことがなく、とまどいのある生徒もいたが、多くの生徒が意欲的に取組み、学習に対して満足できていた。このことは、事後アンケートの結果からも明らかである。〈表4〉満足できた理由として、「自分の考えをうまくまとめることができたから」「付箋紙を使ったり、グループで協力したりしたから」「古典を学ぶ理由がわかっただけでも満足」等を挙げていた。生徒は、付箋紙を使ったり、グループで活動したりすることで、考える楽しさがわかってきたようだ。また、古典を学ぶ必要性について理解することで、古典の学習に対する意欲も高まったと考えられる。

「気づく」段階の事後アンケートから	
肯定的な意見の生徒（％）	
楽しく参加できた。	88%
進んで参加できた。	88%
学習に対して満足できた。	85%

表 4

イ 言語活動について

生徒の書いた付箋紙は、書式がまちまちで、長さや内容に差がみられた。例えば、「油断しない」という内容に対して、「油断すると成功しないこと」といった短いものから、「二本の矢を持っていたら油断するから、これが最後だと思ってやること」といった、話の内容を書いたもの、「野球でも打つときには、この一球で打とうと思わないと上達しない」といった、自分の感想として書いた生徒もいた。これだけの差があっても同じ内容として分類できるのは、KJ法の効果といえる。しかし、作業の時間を短くするためにも、もう少し条件を付けて指示をすべきだったと思う。



KJ法による分類

(5) 「共感する」段階の学習活動について

① 学習活動の様子

「共感する」では、徒然草の九二段で学んだことをもとに、北島康介の手記と比較させ、どの点の手記の内容と共通しているのかを考えさせた。個人で考えた後、それぞれの意見をまとめてまとめるために、収束型のバズセッションを行った。また、授業の終末に、事例を1つだけで終わらせないようにするため、2つ目の事例を、生徒にとって親しみのある漫画（「スラムダンク」）から探し、提示した。

このような授業の流れをとることで、古典と現代の文章との共通点について、一人一人の考えで終わるのではなく、周りの様々な意見を聞きながら、練り上げられた考えに収束することができる考えた。さらに、2つ目の事例を準備することで、より説得力が増すのではないかと考えた。

◇ バズセッションを用いた言語活動 ◇

北島選手の手記は、「予選は抑えて思いきり泳ぐのは決勝という人もいるがその考え方はおかしいと思う。自分はどのレースでも全力で泳いでいる。」という内容である。「今という瞬間を大切に、全力を尽くす」ということが徒然草の九二段との共通点になる。



自分の考えをワークシートに記入する

KJ法と同じように、まず自分の考えを持たせた。ワークシートに「個人」「グループ」「全体」の順で考えを記入できるようにし、自分で振り返るときに、意識の変容が確認できるようにした。ほとんどの生徒が、この活動で意図した共通点に近づくことができたが、全体の12%の生徒が、別の考え方をしていた。例えば、「予選は抑えて」から「油断すること」が共通点だと感じていた。



考えを収束するために練り上げる

グループで話し合いを行い、意見を収束させた。日常よく使っている生活班で話し合わせたため、グループの人数は6～7名になった。個人の活動では別の考えをしていた全体の12%の生徒は、グループでの活動を終えて、ほとんどが意図した共通点に近づくことができた。感想の中には、「グループの話し合いで違う意見が出ておもしろかった」という意見もあった。



グループごとに発表し全体でまとめる

発表は、代表者が板書して、順番に簡単な説明を行った。意図した共通点にまとまったグループが4グループ、意図した共通点に別の共通点を加えてまとめたグループが2グループあった。全体で、各グループの意見を比較し、最終的に意図した共通点にまとめることができた。



2つ目の事例を提示する

時代を超えた共通性の事例が、授業で1つだけの場合は、生徒に「偶然では？」という印象を与えかねない。そこで、もう1つ事例を準備した。とくに漫画から引用することで、現代とのつながりを深め、生徒の関心をより高めることができた。

② 授業の考察

ア 生徒の関心・意欲・態度について

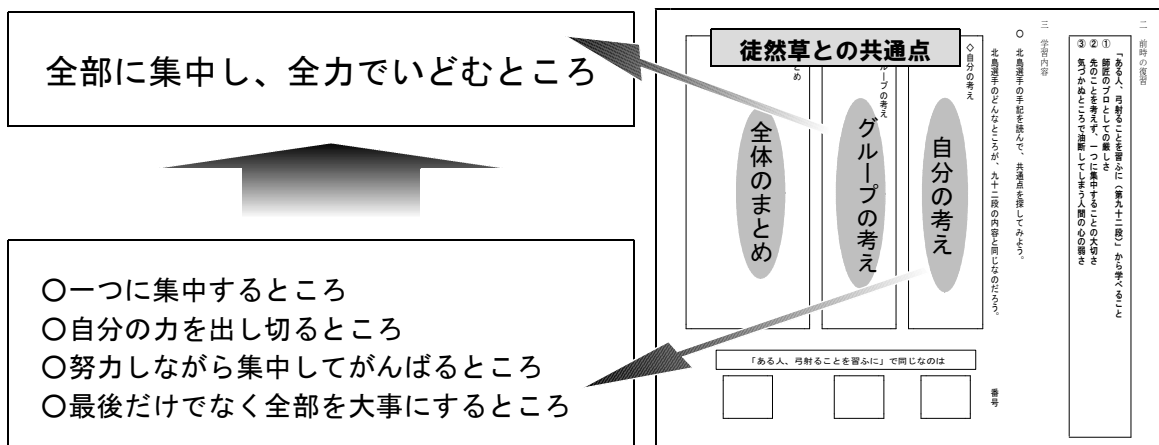
バズセッションを用いた言語活動に慣れている生徒が多く、意欲的に取り組んでいた。日頃から、授業の中でグループ活動することに好意的であり、今回の学習課題に対しても、十分に理解できたことから、事後のアンケートでも良い結果が出た。〈表5〉感想の中には、「今回の古典の授業では、初めは、なぜ古代の文字だけでなく、こういうことを習わないといけないのか、と思ったけど、勉強してみても自分のためになることがたくさんあってよかった」というものもあった。授業の内容に対して満足し、新たな視点を持つことができたのではないかと。

「共感する」段階の事後アンケートから 肯定的な意見の生徒 (%)	
楽しく参加できた。	100%
進んで参加できた。	100%
学習に対して満足できた。	97%

表5

イ 言語活動について

生徒に話し合いの方法を説明する際、「初めから、1人の生徒の意見をグループの意見にするのではなく、いろいろな意見の良いところを合わせて、一番いい意見にしよう」と指示した。あるグループでは、下の表のように、それぞれの意見を組み合わせ、一つの意見にまとめていた。また、中には「すべての力を出し切るところ」「一つに集中するところ」などの意見を比較し、「完全燃焼」という別の言葉を使って、考えを収束させるグループもあった。



「共感する」のワークシート

(6) 「生かす」段階の学習活動について

① 学習活動の様子

「生かす」では、まず、授業を通して感じたことやこれから先のことを意識して、手紙を書いた。手紙を書いた後、各自で推敲し、仕上げてからグループに分かれて見せ合った。その際、友達の書いた手紙に対して「評価をする」という見方ではなく、「良いところを見つけて感想を持つ」という見方をさせた。

このような授業の流れをとって、兼好法師に手紙を書く、という設定で言語活動を行うことにより、じっくり自分と向き合いながら、相手を意識し、自分の考えを深めることができると思った。

◇ 作品づくりを用いた言語活動 ◇



兼好法師に手紙を書く様子

自分のことを振り返らせて手紙を書かせたときに、部活動と結びつけて考える生徒が多かった。手紙の内容は、「集中することの大切さ」に関するものと「気づかぬところで油断してしまう心の弱さ」に関するものが、半々であった。生徒の中には、文章を書くことが苦手な生徒もいて、なかなか筆が進まず、仕上げるのに苦労していた。

② 授業の考察

ア 生徒の関心・意欲・態度について

作品を仕上げるのに苦労する生徒もいたが、生徒は一生懸命に取り組んだ。ただ、「進んで参加できた」という質問に肯定的な意見の生徒が、全体の 72%と低かったのは、「自分の考えを表現する言語活動」として手紙を書かせたことに対し、書くことに苦手意識を持つ生徒が、最初から抵抗感を持ってしまったからかもしれない。(表6)

「生かす」段階の事後アンケートから 肯定的な意見の生徒 (%)	
楽しく参加できた。	86%
進んで参加できた。	72%
学習に対して満足できた。	86%

表6

イ 言語活動について

部活動のことを通して、次のような手紙を書いた生徒もおり、生活とつなげて、自分の価値観や考え方に「古人の思い」を生かそうという姿が見られた。

Dear 兼好法師

兼好法師の作品から、「師匠のプロとしての厳しさ」「先のことを考えず、1つに集中することの大切さ」「気づかぬところで油断してしまう人間の弱さ」などを学びました。

古典からこのようなことが「学べるなんて初めは思っていなかったのですが」「人生の教訓」として、とても役に立つようなことが学べるんだなと驚きました。

私は、中学校で吹奏楽部に所属していますが、毎日ある練習の中で、「どうせまた明日も練習あるから、今日はたのしい軽く吹いておかげいい」と思うときもありません。そして1つも本番が近くなってあせることがたくさんありました。兼好法師さんの「徒然草」という随筆を勉強して、「1つに集中することの大切さ」を学び、「こんなことではいけないのだ」と思わされました。

古典はただ国語の授業で歴史的やな遣いなどを学ぶだけでなく、古典にやられている考え方を吸収することによって、日々の生活に活用できるということが分かりました。

3 研究内容の検証

(1) 仮説1の検証

① 言語活動の効果について

「気づく」段階の事後アンケートから 肯定的な意見の生徒 (%)	
課題に対して自分の考えを持つことができましたか。	88%
付箋紙を使うことで考えを整理できましたか。	91%

表7

生徒は、KJ法をもとに十分に考え、整理することができたと答えている。特に「付箋紙」が考えを整理するのに役立った、と答えた生徒は全体の91%であった。(表7)ただ、KJ法に対して「分け方がわからなかった」等の感想も見られた。日頃から、KJ法に慣れておくと、さらに効果があったのではないかと考える。

② 意識の変容について

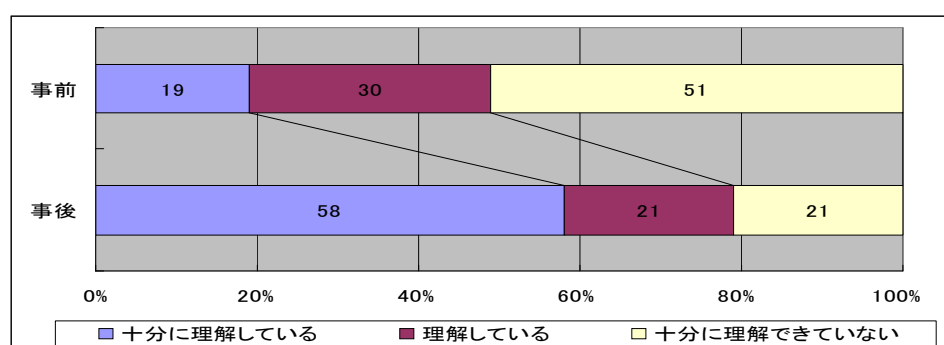


表8 「なぜ古典を学習すると思いますか」

古典の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解できたかについては、当初「わからない」「教科書に出てくるから」と答えたり、「昔の言葉を覚えるため」といった古語そのものの学習だと答えたりするような、いわゆる古典を学ぶ必要性を理解できていない生徒が全体の51%いた。それが今回の授業で、21%にまで減り、逆に理解できている生徒は、全体の79%に増えた。(表4)

検証内容	結論
古典の作品への理解を深め、自分の考えを整理する言語活動に取り組むことで、生徒が作品の魅力に気づき、古典を学ぶ必要性を理解することができるであろう。	自分の考えを整理する言語活動を用いることで、生徒が考えを整理することができ、学ぶ必要性について考える姿が見られた。

(2) 仮説2の検証

① 言語活動の効果について

「共感する」段階の事後アンケートから 肯定的な意見の生徒 (%)	
グループでの話し合い活動は役に立ったと思いますか。	85%
現在にも古典との共通点があると思いますか。	88%

表9

グループでの話し合い活動が、意見を練り上げ、まとめるのに役立ったと答えた生徒は、全体の85%だった。さらに、現代にも古典との共通点を感じることができた生徒も、全体の88%いた。このような結果から、バズセッションの効果は、十分にあったと考えられる。(表9)感想の中には「現代の文章にも古典と共通するところがあって、伝えたいことは同じなのだと思います」というものがあった。

② 意識の変容について

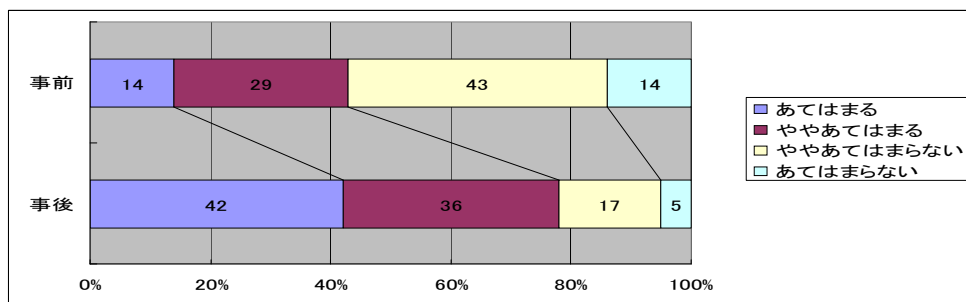


表10 「作品の内容に『なるほど』と思えることができましたか」

古典の作品に共感できない、という生徒が全体の57%いたが、今回の「共感する」授業を通して、22%に減少し、全体の78%の生徒が、「なるほど」と思えるようになった。〈表10〉「古典には、奥深い意味があることがわかった」という生徒もいた。

検証内容	結論
理解した古典の内容と現代の作品を比べ、自分の考えを練り上げる言語活動に取り組むことで、生徒が時代を超えて共感することができるであろう。	自分の考えを練り上げる言語活動を用いることで、生徒が考えを収束させてまとめることができ、時代を超えて共感できた。

(3) 仮説3の検証

① 言語活動の効果について

「作文が書けない」等の理由で、十分に作品にすることができない生徒が数名いたが、それ以外の生徒は、自分の生活と関連させて作品を書くことができた。ただ、アンケートの結果では、「手紙を書くことを通して、自分の生活に生かそうと思った」という生徒は全体の55%にとどまった。〈表11〉しかし、「手紙を書くことが好き」という生徒だけに同じ質問をしたところ、86%が「生かそうと思う」と答えた。手紙を書くことの好き嫌いが、結果に影響を与えており、今後検討すべき課題だといえる。

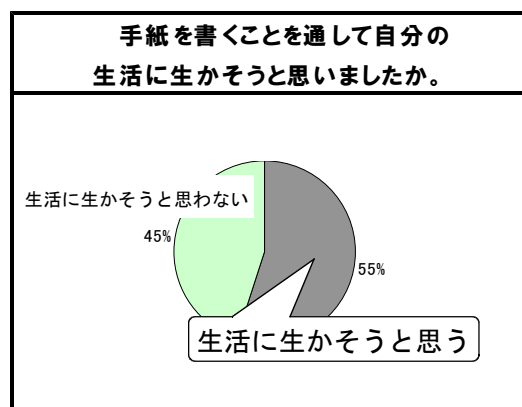


表11

② 意識の変容について

文章を書くことが苦手な生徒にとっては、思うように表現できず、苦勞も多かったようだが、中には「ぼくは、古文の近くに現代語がないと、古文の中の昔の言葉がわかりません。でも、先生がいろんなことを教えてくれました。将来、古文が使われているのを見たら、今習っていることを思い出して、がんばりたいです。」と書いている生徒もいた。このように、古語を覚えたり本文を読んだりする力は、まだ十分とはいえないが、内容から何かを感じ、今後も古典と関わろうという生徒が増えてきた。

検証内容	結論
「気づく」「共感する」をもとに、自分の考えを表現する言語活動に取り組むことで、生徒が古典を自分の価値観や考え方に生かし、生活につなげようとするであろう。	自分の考えを表現する言語活動を用いることで、生かそうとする姿が見られたが十分ではない。今後、検討する必要がある。

(4) 古典に対する意識への検証

「気づく」「共感する」「生かす」に対するそれぞれの仮説を検証し、めざす生徒像の実現を図ってきたが、最後に、今回の研究を通して、古典そのものに対して意識がどのように変わったのかを検証した。

「古典の作品をおもしろいと思う」については、古典の作品をおもしろいと感じている生徒が、全体の54%から78%に増えた。中でも、とくにおもしろいと感じた生徒が、倍近くに増えた。(表12)

「古典を将来も読んでみようと思う」については、ぜひ読みたいという生徒が大きく増えたことと、全く読むつもりがないという生徒が大きく減ったことは、成果といえる。ただ、ぜひ読んでみたいという生徒は、まだまだ少なく、今後も系統的かつ継続的に、実践していく必要がある。(表13)

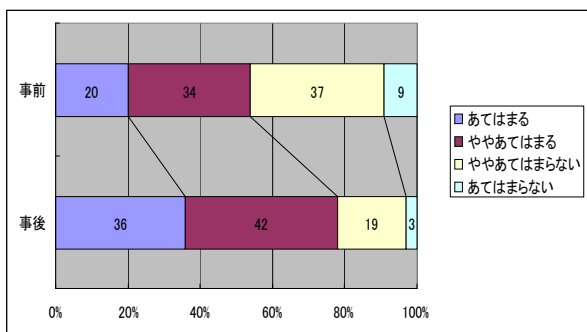


表12 「古典の作品をおもしろいと思いますか」

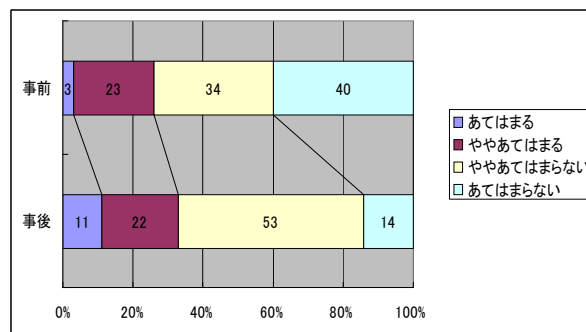


表13 「古典の本を将来大人になって読んでみようと思いますか」

III 研究の成果と課題

1 成果

- 「アイデア発想を用いた言語活動」を取り入れたことで、生徒が作品の魅力を整理することができ、古典を学ぶ必要性を感じ取ることができた。
- 「討議の技法を用いた言語活動」を取り入れたことで、生徒が古典に対して、時代を超えて共通性を感じるようになった。
- 「作品づくりを用いた言語活動」を取り入れたことで、生徒が古典の内容を、自分の価値観や考え方に生かす姿勢を見せるようになった。

2 課題

- 日頃から言語活動の目的を明確にし、より効果的な言語活動を重ねる必要がある。
- 指導と評価の一体化をめざし、言語活動中の支援を工夫していく必要がある。
- 中学校における古典学習全体を見通し、系統的・計画的に取り組む必要がある。

◇参考文献◇

- ・ 中学校学習指導要領（平成20年3月告示） 文部科学省
- ・ 小学校学習指導要領（平成20年3月告示） 文部科学省
- ・ 高等学校学習指導要領（平成21年3月告示） 文部科学省
- ・ 中学校学習指導要領解説 国語編（平成20年9月） 文部科学省
- ・ 教育科学国語教育（2008 8月号）（2008 12月号）（2009 5月号） （明治図書）
- ・ 初等教育資料（平成21年8月） （ぎょうせい）
- ・ 中等教育資料（平成20年6月） （ぎょうせい）
- ・ 国語科授業活性化の探究Ⅱ 一古典（古文）教材を中心に一 渡邊春美著 （溪水社）
- ・ 本気で言いたいことがある さだまさし著 （新潮新書）